

# ネーネーズの「黄金の花」

海山道人



〔2008年7月27日  
ライブハウス島唄にて〕

## 明けもどろ

ステージは暗く、わずかな明かりで、置いてあるPA  
がかりついで見える。

時間が来た。開始の合図もないまま、しのびやかに4

人の女性がステージに出て暗闇の中に等間隔に並んで立った。そのままじつと佇んでいる。表情は見えない。

序奏が始まった。しかし、彼女たちは沈黙したままで。

これから何が起こるのかと思ったとたん、スポットライトのスイッチが入り、舞台が暗闇から光へと転じた。明るい光を浴びた色彩豊かな沖縄の衣装が目にしみる。

この瞬間、全員が歌う体勢に入った。

舞台上の四人は両手を大きく広げ、しっかと前を見すえながら歌い始めた。今まで聴いたこともない美しいメロディが流れていく。

歌が始まって30秒もしないうちに、僕は眼から涙があふれそうになった。

なぜかはわからない。

歌詞が感動的だったのかも知れない。でも、僕には歌詞の意味は全く理解できなかった。琉球の言葉なのだ。分かるはずがない。だが、彼女たちの歌は、人が生きていく上で何かとても大事なことを歌っていると思わせた。おそらく、そのことを、僕の耳は感じ取ったに違いない。

この曲が、「明けもどろ」という1990年台のネーネーズのヒット曲であることをあとで彼女たちから聴いて知った。

「明けもどろ」とは、沖縄・奄美諸島に伝わる古代歌謡「おもしろさつし」のなかで語られた言葉で、太陽が東の空に昇る

とき、朝日に染まりはじめた美しく荘嚴な光景を表現したものである、らしい。

？代目ネーネズ

このネーネズが何代目なのか、僕は知らない。しかしそんな事はどうでも良い。全員魅力的な人たちである。

妖艶な魅力で華麗に歌う与那覇歩さん。

全てを見通し、バランスよくみんなをまとめ、朗々と歌う比嘉綾乃さん。

ややハスキーな声で、現代っ子の風情でかわいく歌う上原渚さん。

眉間に強い意思をにじませ、前を見据えて力強く歌う金城泉さん。

知っている歌、知らない歌が次々に登場する。それだけで充分なのだ。

初めて来た「ライブハウス島唄」で、僕は至福の時を過ごしていた。

彼女たちのステージマナーは「真摯」としか言いよつがない。しかし、その一挙手一投足は、綿密に計算されたものだ。

演出に忠実に動いているに過ぎないのかもしれないが、その動きは、決して奇をてらったものではなく、極めて自然に見える。演出家の才能は勿論あるだろう。しかし、これほど自

然に見えるということとは、彼女たちが演出の意図を理解するのはもちろんのことながら、一人ひとりに備わった人間性がそうさせているとしか考えられない。

この後のステージで歌われた「黄金の花」にある琉球人の魂を、彼女たちもまた持つているのである。

### 黄金の花

ネーネズの歌の中でも群を抜いて美しい歌である。

この曲を初めてCDで聴いたとき、何となく懐かしい気持ちになった。どうもどこかで昔かいた匂いがある。気になつてジャケットの解説をみた。「作詞・岡本おさみ」とあつた。

なるほどそうだったのかと、合点がいった。

僕は随分昔の若い頃、吉田拓郎や泉谷しげるや長谷川きよしの歌を好んで聴いていた。僕は確かに彼らの音楽を好んだが、それは、彼らが歌っていた曲の岡本おさみの詞が好きだったからでもある。当時、彼らとならぶ人気を持っていた(多分音楽的には最も優れた才能を持っていた)井上陽水をあまじり聴かなかつたのは、歌詞に僕の心に分れるものが希薄だったからだ。

それほどに、僕は岡本おさみが好きだった。

彼は、森進一の「襟裳岬」(作曲は吉田拓郎)の作詞者だが、この曲がレコード大賞を受賞した数年後からぱったり人

前になくなった。つまり、彼の詞に曲を付けた歌が出てこなくなつた。気にしていたけれど、やがて時がたつにつれて記憶からうすれていった。

今回の突然の登場に、僕が知らなかつただけなのだろうが、大変驚いたと同時に、「そつか、沖繩にいたのか」と妙に納得したのを覚えている。「彼らしい」と思ったのだ。

岡本おさみには、レコード大賞を受賞した後に出版した『旅に唄えば』という好著がある。彼のようなシャイな人間が、よくこんな本を出版したなあ、とあきれると同時に、きつと出して失敗したと思つてゐるだろうなあという思いがない交ぜになつて心に浮かんだ。そう、あの中に沖繩のことも少し書いてあつたのだつた。

この歌での彼の詞が成功している最大の理由は、「お金」という言葉のかわりに「黄金」という言葉を使ったことだろう。「黄金（こがね）」は、通常よい意味で使う。過去においてそつでない用例はほとんどない。ところが彼は、ここでこの言葉を、人間の良心を麻痺させることもあるという、通常とは逆の意味で用いている。黄金という文字の持つ陥穽を見事に言い表しているのだ。

さて、当代のネーネーズはどのようにこの歌を歌つたのか。

彼女たちは、この歌を歌つとき、遠くにある未来を見つめ

るような眼をして歌う。未来を手元に引き寄せるように、何か強い願望をこめて歌つてゐるように見える。

願望をこめた四人の声は一つになり、本土に働きに出て行つた琉球の人たちを思いやる心情を切々と歌つていく。

歌が最後に近づいた。この歌は最後の数小節を一人の人が歌う。初代ネーネーズで古謝美佐子が歌つていた部分を、今のメンバーのうち、誰がどのように歌つか、僕の興味はそこにあつた。

このステージを初めから聞いていて、きつとこの人が歌つに違いないと思つた人がいた。金城さんである。歌うときに眉間に寄せるしわは強固な意志を感じさせ、頑固の塊のように見えた。僕は、そついう人がこのフレーズを歌うべきだと思つたのだ。

結果は予想通りだつた。

僕は嬉しかつた。

でも、こんな事を書いたら、金城さんは何と言つたろう。きつと怒るだろうな。

「2009年7月25日、ふたたびライブハウス島唄にて」

一年がたつた。また沖繩に來た。來たからには、ネーネー



ズを聞かないなんて考えられない。一年ぶりに訪れたライブハウス島唄の客席に、僕はそつともぐりこんだ。

予想外だったのは昨年のメンバーが2人抜けたことだ。そのために、全体の印象がやや異なったものになっている。聞けば、4月で交代したとのこと。

ベテランの与那覇さんは昨年と同じ雰囲気話し歌っている。安定感がある。もう一人、昨年からの同じ居残り組みの上原さんは大きく変わった。

昨年は、「小生意気なねーちゃん」の風情であったのに、今回はこのメンバーの中核となる存在になっている。ちいさな体なのに、一回りも二回りも成長したと感じた。新しく入った2人はどんな人たちのだろう。

## 余所の人

昨年と同じくコンサートは「明けもどろ」で始まった。真摯な歌いぶりは、メンバーが交代しても変わることなく聴衆を魅了する。新メンバーの2人は、すっかりネーネーズに溶け込んで、まるで百年も前からいるようだ。

ここからネーネーズの歌声に身をゆだねてゆつくりと泡盛を楽しもうと思っていたら、そうは問屋がおりさなかった。今回は冒頭から間もないところで、「余所の人」が取り上げられたからである。この曲は、のんびりと沖縄料理を楽しんでいる観客を、有無を言わず歌に巻き込み、ステージと客席を一体とさせてしまおうという大変な代物なのである。上原さん得意の特技だ。

食べたり飲んだりしたいのに無理やり歌と踊りに参加させられたお客さんたちは、それでも一分も経つと曲に溶け込み上原さんの指示通りに歌い、手を振り、もうすっかり「ライブハウス島唄」の一員になってしまっている。

「余所の人」は阿木耀子作詞、宇崎童作曲の名曲で、本土からきた男の人が沖縄で生活し、沖縄の女性と良い仲間になったのに、ときが過ぎると「また来るから」といつて去っていってしまう情景を描いたものである。やっぱりあなたは「余所の人」という言葉は、女性である阿木耀子にして初めて歌

詞にできたとしか思えない。阿木耀子はどこの人なのだろう。まさか「余所の人」ではあるまいな。

さて、上原さんの大技が決まり、客席も和んだところで、次々にヒット曲が歌われていく。僕は、一人ひとりのメンバーがどのように歌っているかに興味を持ち、彼女たちの歌に耳を傾けた。



与那覇歩さん 今回僕は、前回来たときは逆の、ステージに向かって左手に席を占めた。従って、今回正面に見えるのは与那覇さんだ。近くで見ると彼女は、優雅な身のこなしと華やかな歌唱で、一輪の美しい花のようだ。全体にゆったりとした雰囲気身をまとい、速い曲よりもテンポの遅いバラード風の曲が似合っているように思えた。

メンバーのうち2人が抜けてしまったので、彼女の存在は大きい。コンサートのリードは上原さんに任せるとしても、全体を見るのは彼女の役目だろう。それにしても嫣然と微笑んだときの彼女は魅力的だ。正面に座ってはじめて分かった

ことだった。



た今、自分が何とかしなくては、という思いがあるのだろう。ステージからはその懸命さがひしひしと伝わってくる。人間的に大きくなったという印象を強く受けた。

比嘉真優子さん 今回新たに加わったメンバーの一人。大きな口をあけて天真爛漫に



上原渚さん この人は、一見、ミスターのねーちゃんに見えるが（実際そのとおりだと思いが）、その一方でネーネズ全体を一人で支えているようなところがある。昨年は、年長のお姉さんたちに見守られながら、どじを踏んでも誰かがカバーしてくれるというような甘さが見受けられたが、それがなくなっ

歌つその姿は、まるで鳥山明描くところの「あられちゃん」のようだ。堂々とした歌いぶり、歌だけ聞くととてもこの年齢（19歳？）とは思えない。アイルランドの名歌手・ドロレス・ケーンは、若い頃「顔は乙女、歌は熟女」といわれたが、この人にもその雰囲気がある。これから先まだまだ成長するであろうが、大輪の花を咲かすのは何年も何年も先になるだろう。楽しみである。



ない人になるだろう。

真夜中のドライバー

コンサートは、まだまだ続く。その中で、「真夜中のドライ

バー」という曲が印象に残った。

この歌は、「黄金の花」と同じく、出稼ぎに本土に出て行った人に対する心情を綴った歌である。都会に出稼ぎに行つてタクシードライバーとなった恋人を心配し、さまざまな想像をめぐらす若い女性の心のうちを、少しユーモアをまじえて詞に作り上げている。

実は、岡本おさみには、これよりずっと以前に同じテーマで作った詞がある。東京に集団就職で出てきた若い女性が、これから送るであろう都会での生活を書いた「制服」という題名のすばらしい詞である。その切々たる言葉の数々は、初めて東京に出てきた彼らが遭遇するであろう状況を浮かび上げさせ、それに対する作詞者の心情を良くあらわしている胸を打つ。曲は吉田拓郎が付け、拓郎自身が歌っているが、詞にぴたりと寄り添ったメロディーは彼の叫ぶように歌つ声によくマッチし、希代の名曲に仕上がっている。

同じく出稼ぎに行つた人に対する心情を綴っているといつても、「制服」の詞は哀切の情に満ち、彼らへの共感と同情に満ち満ちている。まだ若かった岡本おさみには、ひとごととは思えなかつたのであろう。一方、「黄金の花」や「真夜中のドライバー」は、哀切の情がそこはかとなくただよっているが、どこことなくユーモラスで、微笑ましい感じがする。彼も年をとり、よつやくこのような人たちを客観的に見るよう

になったということがも知れない。

「真夜中のドライバー」は、女性の語り口で作られている。同じ女性であるネーネズの歌は、シリアスな面もユーモラスな面も、女性であるがゆえの共感がよくでており、自然ですばらしいと思う。ただし、まだ若いメンバーにとっては、内容への理解がまいちかもしれない。

### 3人ネーネズ

この文章をまとめようとして、ひさしぶりにホームページを開いたら、ネーネズが3人になっていて仰天した。

一体いつからそうなっちゃったのが。

日付を調べたら、僕がお邪魔した1週間後に、なんと与那覇さんがネーネズを「卒業」してしまっただけ。あとは3人でやると書いてあるではないか。

クラシック音楽に弦楽四重奏曲というものがあ、2つのバイオリンとビオラとチェロによって演奏される。この4人のグループを弦楽四重奏団という。

弦楽四重奏団は、結成後、時に何らかの理由により1〜2人のメンバーが交代することがあるが、通常は長い間同じメンバーで演奏し、中心となる人の年齢が限界を超えたとき、終止符が打たれる。稀に、スタート時のメンバーが完全に入れ替わっても、その伝統を引き継ぎ、すぐれた演奏を聴かせ

る弦楽四重奏団もある。ジュリアード弦楽四重奏団は、1946年に結成されて以降、全てのパートのメンバーが次々に入れ替わったが、2009年の今日も、デビュー当時と同じように、素晴らしい音楽を聞かせている。しかし、これは稀な例である。

通常は、メンバーが交代するとその音楽性を保てなくなり、もとの名称を名乗れなくなり、その多くは解散するか、別の名称を名乗る事になる。コーラスグループも同じで、ダークダックスやデュークエイセスのように、イメージが定着してしまったグループはメンバーの変更がきかない。

ネーネズは、初代が1990年に結成され、その後、何度もメンバーが入れ替わったにもかかわらず、同じ歌に新しい息吹きを吹き込みつつ同じように歌い、更に新しいレパートリーを増やしている。

そのようにできる理由は二つあると思う。一つは、彼女たちが沖縄で生まれ育ったという共通基盤を持っていることである。中にいる人たちがどう思っているのか分からないが、外から見た沖縄は、やはりある明確な特色を持っている。その特色はネーネズの歴代メンバー全員に備わっているものである。

もう一つは、このグループが、ハーモニーではなく、4人が原則として同じ旋律を歌うということと関係していると思



う。一人ひとりが異なった旋律を歌つのであれば、その個性はより顕著になるであろう。しかし、ネーネーズは、むしろ一人ひとりの個性を出さないようにして一つの音の世界を作っている。それでも彼女らの個性の違いは歴然としているのだが、個性を「出さないようにしている」この意味は大きい。それがゆえに、全体として均質の音楽となるため、初代から当代まで、人は次々に変わってもネーネーズとしての特色は保たれている。だからこそ、一人欠けてもネーネーズはネーネーズとしてやっていけるのである。このグループを創造した知名定男という人は天才に違いない。

そんなことを考えつつも、あんまり驚いたので、3人になつてしまったネーネーズをどうしても聞きたくなり、また沖繩に飛んでしまった。着いてから、ホテルに荷物を預けるのもそこそこに、那覇市の国際通りに向かって急いだ。興味津々好奇心の塊となった僕は、ライブハウス島唄の客席に突入した。

〔2009年11月27日、みたびライブハウス島唄にて〕

開演の時間が来た。いつもどおり、彼女たちは照明を落としたステージに等間隔で立った。4人ではなく、3人のネー



ネーズだ。

スポットライトのスイッチが入り、「明けもどろ」が始まった。美しいメロディ、きれいな声、見事な歌……、予想通りだったが、嗚呼、やはり……歌に厚みが足りない。

このネーネーズも、全員豊かな音楽性を備え、美しい声を持ち、真摯に歌うすばらしい人たちだ。3人のうち最も音庄の強いのは比嘉真優子

さんと思われるが、その彼女がいるからといって、3人の声で4人の声になるうはずもない。僕は、このとき初めて、ネーネーズが3人でもなく5人でもない、4人組のグループとして発足した理由を理解できたように思った。しかし、3人であっても、ネーネーズがネーネーズである事に変わりはない。



い。

今回の進行係は、比嘉真優子さんだ。この人は、前回来たときに比べて、また一層歌がうまくなっている。小気味よくこぶしを効かせ、フレーズの最後にクイツと見得を切る様子は歌舞伎役者のようだ。それになんだか色っぽくな



った。



今回の席は、ステージに向かって中央よりやや右側で、仲本真紀さんが正面に見える。前回は彼女から最も遠い席にいたので分からなかったが、今回は改めて正面から見た第一印象は、「なんてつぶらな瞳をしているんだろっ」だった。やや細身のきれいな声の持ち主で、「黄金の花」の最後のソロもこの人が歌う。出すぎず、引きすぎず、ひたすら自分の役割を果たしている。普段は引つ込み思考で、音楽でのみ自己を主張する人のように見えるが、実際はどんなのだろっ。華奢な体つきな

から、その小さな体の全身を使って自在のバチさばぎを見せる。太鼓の名手だ。

比嘉さんの進行で、次々に曲が歌われる。3人であるうと、ネーネズでなければ出せないサウンドを聞くのは、やはりうれしい。



しばらくして、僕は奇妙な事に気が付いた。向かって左で歌っている上原さんだけが、何か不思議なものに包まれているように見える。照明のせいかと思っ、一旦目をそらし、もう一度見てみたがやはりそう見える。何も無いのにそう見える。

この人は、もともとミスターのねーちゃんのような感じで、背筋を伸ばして歌うと一変して厳しい表情になるが、それでも何かしら暖かい雰囲気があった。それが、今回は透明のヴェールに包まれて周囲から隔絶して見える。それに氷のような冷たい感じを放射している。そんなはずはないと思、何度見直してみても同じだった。懸命に考えたがどうしても分

からない。僕は頭の中にたくさんの？マークをくつつけたまま、コンサート の進行に身を任せた。

ライブハウス島唄の客席は前後に分かれており、全体で一〇二 人収容できると思われる。最初は少なかつた客もだんだん増えてきて、第2ステージでは後ろの席にたくさんの人が入り込み、歌にあわせて歌ったり踊ったりして楽しそうだった。きつと沖繩の人たちなのだろう。この店に来たのはこれで3度目だがこんなのは初めて見る。一〇〇人のお客さんが入ったライブハウス島唄の情景は壮観だ。

そのうち後ろの席の人たちは、だんだんお互いの話に夢中になり、ついに自分たちで勝手に盛り上がりつつしまった。上原さんがマイクを取り、「私たち以上に目立たないように」と言っても、もう遅い。第2ステージの最後の「黄金の花」の最中も騒ぎはおさまらず、歌のほつが押され気味になっている。

しかし、ステージ上の3人は毫も動ぜず、正面を見据えてこの名曲を見事に歌いぬいていく。全ステージを通じて最大の聴き所で歌われたこの曲をじっくり味わいたいと思っていたお客さんはたまったものではないが、僕は、これもまた沖繩らしくて良いなと思っていた。

そのとき、上原さんの周囲をおおっていた透明なヴェールのよつなものが霧が晴れるように薄れて行くのに気づいた。

第3ステージが始まってしばらくすると、ヴェールはすっかりなくなり、もとの暖かい雰囲気の上原さんが戻ってきた。

僕はハタと思い当たった。

上原さんは2人分を1人で引き受けているのではないか。

このネーネズは欠けた1人分を3人で平等に分担しているのではない。その1人分は上原さんが1人で背負っているのではないか。

そう考えると納得がいく。

冒頭のトークを比嘉真優子さんが担当しているのは、2人分を引き受ける上原さんの負担を軽くするためではないか。前回来たときにはけっこう喋っていた仲本真紀さんがだんまりを決め込み、歌と太鼓に専念しているのは、前面に出ている他の二人を後ろから支えているからではないか。

上原さんの周囲をバリアーのように包んでいた透明のヴェールのようなものは、彼女が持っている強い使命感と極度の緊張感が生み出したものではないか。氷のように冷たい雰囲気を感じたのはそのせいだろうし、第2ステージの後半から少しずつそれが薄れていったのは、すでにコンサートも半ばを過ぎ、もう大丈夫だという安堵感が出てきたからではないのか。

3人のネーネズにはやはり無理がある。

無理を承知で彼女たちは歌っている。

この無理な情況がいつまで続くか分からないが、いつの日か、もう一人増えて本来のネーネズに戻る日を心待ちにし、毎日歌っているのだらう。

それにしても、ステージ上でそれを感じさせない彼女たちは本当にすごい。冗談を言ったり、客を無理やり躍らせたりと結構パフォーマン스가上手である一方、一旦ステージから降りるや、一人ひとりのお客さんに丁寧に接し、終演後は最後の一人に至るまで、挨拶をして送り出す礼儀正しいお姉さんたちである。

僕は、どうしても最後まで聴きたくて、とうとう第3ステージまで居残り、見送ってくれた彼女たちにさよならを言って、ライブハウス島唄を後にした。

コンサートに満足し、歌の余韻に浸りながら国際通りを歩いていると、不意に「遠い道」の二節が脳裏に浮かんだ。

一見遊び風に聞こえるこの歌の真意を誰が知ろう。重大な仕事を引き受けたからには、なんとしてもやり遂げようという決意を歌ったこの歌は、孤独の中に身をおきつつも、世のため人のため、人知れず努力する人たちへの応援歌なのだ。3人となってしまったネーネズの各メンバーは、齒を食いしばって頑張っているにちがいない。

「たとえこの腕折れるとも、やりとげなければこの腕で」と思いながら……。

## 注

### ネーネズ

1990年に沖縄で結成された4人組の女性コーラスグループ。初代ネーネズは結成以来多くの話題を呼び、その高い音楽性とともに、沖縄の心を歌うグループとして、沖縄のみでなく全国的に広く知られた。1990年の沖縄コンベンション劇場での公演を節目に新しいメンバーに交代し、その後も次々に人が代わったが、いずれも歴代のネーネズの伝統を引き継いで現在に至っている。現在のメンバーは、文中にあるとおり、上原渚さん、比嘉真優子さん、仲本真紀さんの3人である。いずれ本来の4人グループに戻ると思われるが、不明（この原稿の最終校正を行っていた1月10日にネーネズのホームページを覗いたら、2010年1月1日より保良光美（やすらてるみ）さんがメンバーに加わったとあった。5ヶ月の期間をおいて再び4人のネーネズに戻ったことになる）。

### ライブハウス島唄

那覇市の国際通り沿いにある沖縄音楽のライブハウス（沖縄料理のレストランを兼ねている）。以前は宜野湾にあったと聞いているが、何年か前に現在の場所に引っ越して来たらしい。每晚コンサートが開かれ、沖縄音楽を代表するミュージシャンが演奏し歌う。ネーネズはその中において最も演奏回数が多い。ステージは3回あり、その都度衣裳を換え、また全ステージを通して1曲も同じ曲は

歌わない。筆者はこれまで3回訪れたが、サービスをしてくれる人たちもネーネーズのメンバーも礼儀正しく、料理はおいしく、楽しいひと時を過ごすことができた。

### 明けもどろ

知名定男作詞作曲 孤島に暮らす人々の神々への祈りの歌である。1997年にリリースされたアルバム『明けもどろ〜つない〜』の冒頭に収録されている。沖縄の言葉で書かれているため、訳詞がないという意味はよくわからない。中の「島ちゃび」というのは、孤島で暮らす人々の宿命的な悲しみを意味する言葉らしい。

### 黄金の花

ネーネーズ最大のヒット曲。岡本おさみ作詞、知名定男作曲。沖縄から本土に出稼ぎに行った人たちに、もっとも大事ななお金ではなくてあなた方の心なのですよ、と切々と説く思いが、すばらしいメロディーに託して歌われ、多くの人の共感をよんだ。筆者はテレビをほとんど見ないので知らなかったが、筑紫哲也が、彼自身がキヤスターを務める番組でこの曲を流していたという。

### 『旅に唄あり』

岡本おさみが1977年に出したエッセイ集(八曜社出版)。中に彼の多くの詩(詞)を含む。大ヒットした「襟裳岬」のあと、2年



おさみの心情がよく描かれている。彼の鋭い感性が随所につかかわれ、読み物としてもたいへん面白い。この中に掲載されている詩(詞)のうち、曲がつけられたものもたくさんあり、それらの歌がどのよくな状況のもとで生まれたかを知るのは楽しい。彼がいかに優れた詩人であるかがよくわかる一冊である。

### 遠い道

岡本おさみ作詞、知名定男作曲 重大な仕事を自分ひとりでやり遂げなければならぬ人の心境を、サバニ(小さな丸木舟)に乗って遠くに漕いで出て行くことになぞらえた詞。

のんびりとした曲調と深刻な歌詞とのアンバランスが絶妙である。文中の「たとえこの腕折れるとも、やりとげなければこの腕で」という部分は、この歌の一節。

半あまりの旅の生活の中で書いた文や詩(詞)を集めたものである。学生運動の盛んだったころの世相が映し出されており、当時の状況に対する岡本